

歴史探訪 御願塚古墳（その2）

～古墳から“あなの”の文化を考える～

26期 兼田吉治

私は昭和37年(1962年)に御願塚古墳を訪ねたことがある。当時の御願塚古墳はうっそうと茂る藪に囲まれていて、人もめったに訪れない寂しい場所であった。当時、私が住む独身寮が御願塚古墳から西南西に600mの位置にあり、北野高校に通う最寄り駅も阪急電車稲野駅で、古墳は駅から北西150mの位置にあった。そんなに近くにありながら、その後20年ほど古墳を訪れた記憶は無い。近畿の古墳群はいずれも同じで、当時古墳への市民の関心は薄く、古墳の周辺はのどかな農地などが多かった。古墳の周囲環境に大きな変化が生じるのは、戦後の高度経済成長期と呼ばれる昭和40年代後半から50年代にかけてである。周辺は宅地化が進み町の中の古墳となっていた。御願塚古墳も同じであった。

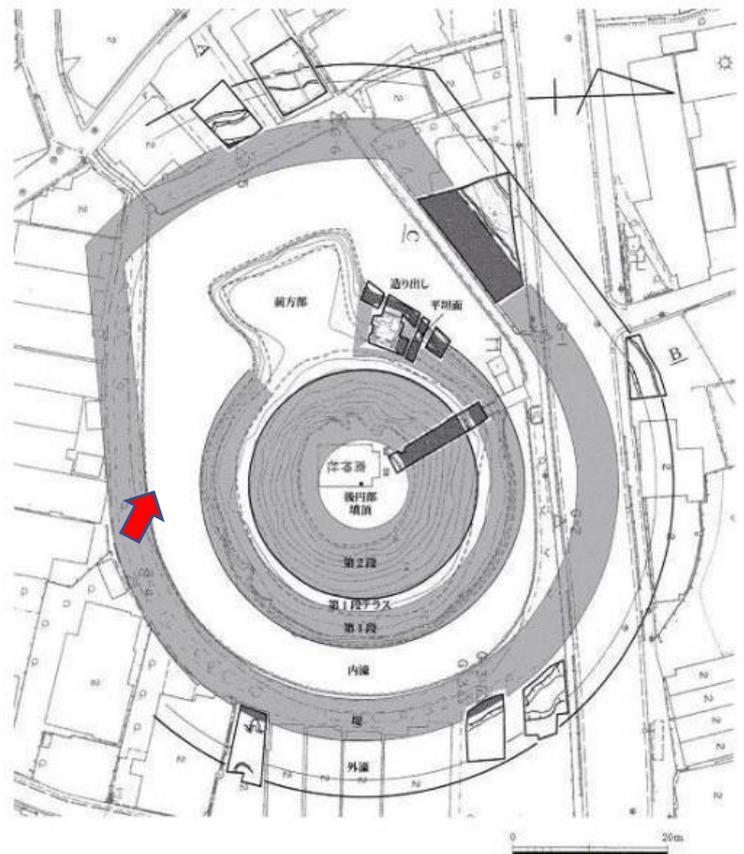
御願塚古墳の概要

御願塚古墳は5世紀後半の帆立貝式前方後円墳で、墳丘の周囲には水をたたえた周濠が巡っており、墳丘だけで全長52m、周囲の濠の幅は8～11mの規模を持つ。古墳の頂部には延宝9年(1681年)創建の孝徳天皇を祭神とする南神社が祀られていて、この神社が祀られたことにより古墳が破壊から守られたとも言われている。墳丘は緑におおわれ、春にはキリシマツツジが、初夏には水辺に菖蒲が美しく花を咲かせる猪名野古墳群を代表する古墳の一つである。

昭和41年に県指定史跡となり、昭和44年から平成12年まで9次にわたる調査が行われた。その結果、多数の埴輪が出土し、二重周濠であったことや、墳丘北西側に埴輪列で囲まれた「造り出し」と呼ばれる祭祀遺構が検出されるなど、学際的研究も進展しているそうである。



写真1 周濠が巡った御願塚古墳（先が前方部、手前が後円部）



御願塚古墳復元図[2]（赤矢印が上記写真の撮影方向）

御願塚村では長らく孝徳天皇の陵墓であると信じられていて、明治8年に政府の許可を得て地元の人々により古墳の一部が発掘された。その時、地中より石組が現れたが、それ以上の発掘は許可されず被葬者に関する詳細はわかっていない。村民が求めていた陵墓の指定も、既に大坂磯長陵が孝徳天皇陵と比定されていることを理由に却下された。

この史実から、近代天皇制国家を必要とした明治政府が天皇中心の国家体制の一環として陵墓の整備と聖域化を推し進めた流れの中で、新政府の旗本領没収により岡野家など領主4家から解放された御願塚村の人々が、御願塚古墳を通して村の発展を願って行動を起こした様子が推測される。残念ながらその願いは叶わなかったようである。

被葬者は誰？

古墳は、一定の時代範囲のなかで共通の葬送儀礼様式と墳墓様式に基づいて造られている。そのため、統一的に格差づけすることが可能で、形と規模を基準に、顕著な階層的秩序を形成していると言われる。形は前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳が基本で、古墳の形と規模は被葬者の勢力内における政治的身分を反映していると考えられている。

御願塚古墳の被葬者は、その後の研究で猪名部(いなべ)と呼ばれる渡来人の首長の墓ではないかと考えられている。では、この猪名部とはどのような人物だったのだろうか？日本書紀には、この時代の渡来人として猪名部真根(いなべのまね)と猪名部御田(いなべのみた)の名が出てくる。猪名部真根は雄略天皇の時代(457～479年)の木工とある。猪名部は天皇や氏族に隷属する職業部のひとつで、土木技術を提供する工匠集団であった。その工匠集団の長には新羅系の渡来人が任命されていた。4世紀末ごろ、武庫の港に繋がっていた新羅の船が火事になり、日本の船も類焼したので新羅に賠償を請求したところ、有能な工匠が新羅王より貢進され、造船や土木・建築工事にたずさわっていたという。真根は『日本書紀』雄略13年(469年)の記事に名工とうたわれている。この猪名部一族は、伊丹のあたり、猪名川の流域に住んでいたと言われており、日本書紀によるとこの地は朝鮮半島との交渉の拠点であったということで、猪名川流域は武庫の港とともに非常に重要な地域であったと推測されている。御願塚古墳は、この猪名部一族の長の墳墓なのであろうか？

その他日本書紀には、雄略天皇の策略で猪名部真根が采女の裸相撲を見させられて刃物の腕を狂わせる話や、雄略天皇が猪名部御田に采女の事で疑いを持ち処分しようとする話など、興味湧く説話がいくつかあり、いずれも腕のたつ工人として記されている。

御願塚の名前の由来

元は周囲に満塚(みちづか)・掛塚(かかりづか)・温塚(ぬくめづか)・破塚(やぶれづか)の4基が陪塚として築かれており、この4基と本体の古墳を合わせて五ヶ塚(ごかつか)と呼ばれていたものが転じて「御願塚」



写真2 御願塚景観形成住宅 伊丹市指定 籠邸

になったとされている。4 墓の陪塚はいずれも宅地造成で破壊され、跡地には位置を示す石碑が建てられている。

ちなみに、御願塚古墳から南に 1.5km の位置にある阪急電車塚口駅周辺は「塚口」と呼ばれているが、御願塚古墳から塚口までの周辺には前方後円墳の池田山古墳(塚口本町 6 丁目)、御園古墳(塚口本町 8 丁目)、大塚山古墳(南清水)、伊居太古墳(下坂部 4 丁目)、南清水古墳(南清水)等からなる塚口古墳群が点在しており、古墳を背後にひかえていることに由来して「塚口」という地名になったと考えられている。

江戸時代を彷彿とさせる御願塚景観住宅

御願塚地区は昭和 47 年に中心部を山陽新幹線が通ったため南北に分断され、旧御願塚村の歴史的景観も維持されなくなった。そのような中でわずかに江戸時代を彷彿とさせる歴史的景観が残っている。伊丹市では歴史的価値を持つ建築物等を「都市景観形成建築物」として現在 15 件を指定しており、

この中の 3 件が御願塚地区の住宅である。写真 2 は市指定第 9 号の笹邸で、市資料には「御願塚の歴史的集落にあって天保 9 年(1838 年)に建てられた家屋で、母屋や、これを囲む蔵・門・塀・垣・庭木などが、伝統的農家の屋敷構えを見せ、付近の須佐男神社の緑と調和した景観を形成している」とある。写真 3 は市指定第 28 号の田中邸で、「母屋を囲む長屋門と塀、そして納屋などが伝統的な農家の屋敷構えを見せ、前面の道すじ植栽や水路と一体となった潤いある表情は、周辺の須佐男神社などとともに御願塚の歴史的集落景観を形成する重要な要素となっている」と説明されている。須佐男神社と一体となった歴史的集落景観は他に写真 4 など複数戸が見られる。



写真 3 御願塚景観形成住宅 田中邸の前で 筆者



写真 4 歴史を偲ばせる静かな町屋 (御願塚 3 丁目)

有馬山 みののささ原 風吹けば

御願塚古墳は J R 猪名寺駅から西北西に 750m の位置にある。御願塚古墳があるこの辺りは万葉の昔から “みのの”【猪名野 (いな の)】と呼ばれていた。

“有馬山 みののささ原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする”

百人一首 58 番、紫式部の娘である大式三位(だいにのさんみ)が詠んだ歌である。逢瀬が途絶えがちになった男が、「あなたが心変わりしたのではないかと気がかりです」などと言っ

てよこしたのに対して、「有馬山にほど近い猪名の笹原に風が吹くと、笹の葉がそよそよと音をたてるように、さあ、そうですよ、あなたのことを忘れることがありましょうか、いや、けっして忘れません。」と詠んで、永く途絶えていたくせに「よくもそんなことが言えますこと」というような気持ちで返した歌だそうである。和歌には“あなの”の地名は「猪名の伏原」「猪名山」「猪名の湊」という形でも多く詠まれた。

法隆寺と同じ規模の古代寺・猪名寺廃寺と伊丹廃寺

摂津国の歌枕として「猪名の笹原」と呼ばれたこの地は古代から栄えていた。先の和歌は平安時代であるが、更に遡ること350年。飛鳥時代には法隆寺と同じ伽藍配置を持つ古代寺院が2寺あった。御願塚古墳から東に1kmの猪名寺廃寺と、北に3.2kmにある伊丹廃寺である。東に金堂、西に五重塔、これらを回廊が囲む伽藍配置が法隆寺とほぼ同等であった。

猪名寺廃寺では時の権力者との繋がりをしめす“川原寺式軒丸瓦”や、“高句麗系軒丸瓦”鴟尾(しび)等が発掘調査で見出されており、柱座と舍利孔が見られる塔心礎は廃寺跡に残されている。更に、猪名寺廃寺の旧地名・猪名寺字佐璞丘(さぼくがおか)の「佐璞」とは唐の官制で左大臣のことをさす「左僕射〔さぼくや〕」に通じるとされる等、猪名川流域に飛鳥(ヤマト王権)とネットワークをもつ氏族、さらに新羅や百済の寺院についても情報をもつ渡来系氏族・集団が居たこと等が想定されている。

伊丹廃寺で出土した遺物のなかには、五重塔の頂きを飾る水煙や九輪、風鐸などの金具類や、金堂の内壁を飾った博仏(せんぶつ)など貴重なものが多く、昭和52年に出土遺物1,027点が一括資料として県指定文化財に指定されている。出土した瓦には、菊花様単弁花文(きっかようたんべんかもん)軒丸瓦や、波状文縁複弁(はじょうもんえんふくべん)花文軒丸瓦などがあり貴重な資料となっている。礎石は早くに遺跡から持ち出され、あちこちの庭園の庭石に使われたりしていて、臂岡天満宮(伊丹市鑄物師1丁目)境内にある複数の巨石や伊丹郷町館内旧石橋家住宅北側の沓脱ぎ石もそのひとつとされている。

猪名寺廃寺も伊丹廃寺も、伽藍は天正6年(1577年)の荒木村重と織田信長の戦乱により焼失し、廃寺になったと推定されている。戦はいつの時代も文化を破壊する。

見てきたように、古くから“あなの”と呼ばれた御願塚古墳があるこの辺りは、5世紀後半の古墳時代から飛鳥時代、そして平安時代へと、中央の文化と繋がる重要な地として栄えて来たことを、古墳を通じて窺い知ることができるのである。

参考資料

- [1] Wikipedia：御願塚古墳、猪名部真根、猪名部御田、雄略天皇、猪名寺廃寺、伊丹廃寺、他
- [2] 伊丹市ホームページ：御願塚古墳、都市景観形成建築物
- [3] 小西酒造 FUJIYAMA.NET 伊丹歴史探訪 第一章 伊丹歴史探訪へのいざない
- [4] 寺岡 洋：播磨の古代寺院と造寺・知識集団 西摂の古代寺院1 -猪名寺廃寺-
- [5] 伊藤ていじ：日本の工匠
- [6] 兵庫県立考古博物館 館長 和田晴吾：日本の古墳の特徴とその世界観
- [7] 尼崎市歴史博物館：Web版 図説 尼崎の歴史,第1節, 第2節 コラム
- [8] 御願塚ふるさとマップ 御願塚史跡保存会編